

薬学部で「医療DX」テーマに四半期授業 慶応大、クオールHDの寄付講座で

2025/6/9 13:44



グループで新サービスを検討した最終回の授業

慶応大薬学部で4月から6月上旬まで、2年生を対象にデジタルヘルスをテーマにした四半期授業が行われた。クオールホールディングス（HD）の寄付講座で、企業やアカデミアから多くの外部講師を招き実施。半期を通じて医療DX（デジタルトランスフォーメーション）を深掘りする授業は全国の薬学部で初とみられる。思考が柔軟な低学年のうちにDXの全体像をつかんでもらい、急速に進むイノベーションの流れに適応できる薬剤師・研究者を育てる狙いがある。

授業では、医療DXの最新トピックや実例を学び、医療の現在と未来を考える内容。薬局・薬剤師に関連するDXを扱ったほか、NECヘルスケア、中外製薬、カケハシらから外

部講師を毎回招いた。担当する堀里子教授（医薬品情報学）は、学生には単なる知識のインプットではなく「実際の現場でどう使われているか」を知ることが重要だと指摘。まだ医療制度や規制の知識が少ない低学年のうちに全体像を把握してもらうことにこだわったという。寄付講座とすることで、柔軟な授業設計が可能になったとも述べた。

6月3日の最終回では、学生がグループでデジタル技術を活用した医療分野の新規サービスを考え、プレゼンテーションを行った。現状の課題から解決法を考えるプロセスを重視し、「誰が、どのようなことに困っているのか」を明確にした上で検討。学生からは、過疎地域の高齢医師と後継者をマッチングするサービスや、周囲の薬局の混雑状況が一目で分かるアプリなどの提案があり、講師陣から講評を受けた。

●デジタル「使われる側でなく使う側に」 クオール・樫尾氏

初回を含め3回講義を担当したクオールHD中核会社クオールの樫尾浩幸取締役は「人口減少など、日本が直面している課題を初回にしっかりと伝えた上で学んでもらった」と説明。2年生が対象という点については「低学年のためユーザー側の視点が強く、臨床経験などから来るバイアスもない」と歓迎し、「技術の進歩で前提となる価値観が変わることもあり、今学んだことが卒業するころには変わっていたということも体感してもらいたい。社会課題をデジタルとひも付けて考えてもらう姿勢を身に付けることが重要で、デジタルに『使われる側』ではなく『使う側』に回ってもらいたい」と述べた。



講評を行うクオールの樫尾氏（中央）

堀氏は薬学でのDXの扱いについて、1～2時間程度授業で取り上げる例はあるが、四半期を通して扱うのは「非常に珍しい」と指摘。今後の展開は学生からの感想なども見ながら考えていくとした。